〈研究ノート〉

糸賀一雄の共感思想と「ミットレーベン」
―「共感」から「共鳴」への道程―

國　本　真　吾

Shingo KUNIMOTO：
Itoga Kazuo's Thoughts on Empathy and "mitleben"
―The Steps from Empathy to Emotional Resonance―

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要　第73号　抜刷

2016年 7 月

〈研究ノート〉

糸賀一雄の共感思想と「ミットレーベン」
―「共感」から「共鳴」への道程―

國　本　真　吾[1]

Shingo KUNIMOTO : Itoga Kazuo's Thoughts on Empathy and "mitleben"
―The Steps from Empathy to Emotional Resonance―

本稿では，戦後「障害福祉の父」と称せられた糸賀一雄が，故郷である鳥取の地で行った最期の講義で用いた「ミットレーベン」の言葉の意味を，糸賀の共感思想との関係で読み解いた．「ミットレーベン」には，「共感」を中核とする人間理解とともに，新しい社会の建設を願った「共鳴」への期待が込められていると理解できる．今後の糸賀の研究において，「ミットレーベン」の語の解釈は糸賀思想の読取りの鍵になるであろう．

キーワード：糸賀一雄　発達保障　ミットレーベン　近江学園　皆成学園

はじめに

戦後，わが国において「障害福祉の父」「知的障害児の父」と称せられた糸賀一雄（1914～1968 年）は，福祉分野のみならず教育分野においても多大な影響を与えたことで知られる．2014 年，糸賀の生誕 100 周年を記念して，糸賀が活躍した滋賀県では盛大に顕彰事業が行われたが，生誕の地である鳥取県においても顕彰事業が取組まれた．その一つが，筆者が編集を行った糸賀の講義録『ミットレーベン～故郷・鳥取での最期の講義～』の発行である[1)]．

この講義録は，糸賀が故郷・鳥取県において行った講義の内容を文字化したものであるが，発行に際しては故郷の地における「最期の講義」として銘打った[2)]．講義録に収められている内容は，1968 年 1 月 18 日に鳥取県立皆成（かいせい）学園（倉吉市．障害児入所施設）で行われた糸賀の講義である．講義はオープンリールのテープに約 3 時間にわたって録音されていたもので，生誕 100 周年に際してデジタル化された[3)]．ちなみに，この講義の 8 か月後にあたる同年 9 月 18 日に糸賀はこの世を去っており，死の前日である 9 月 17 日に滋賀県大津市で行った講義「施設における人間関係」は，没後に刊行された『愛と共感の教育』の中に収録されている[4)]．

この講義で触れられている内容は，晩年の糸賀の著作等とも重なるところが多い．当時は，糸賀の代表著作『福祉の思想』[5)] の出版直前という時期でもあり，『福祉の思想』や『愛と共感の教育』などに収められているものとも重複するものが目立つ．そして，西日本で最初に設置された重症心身障害児施設びわこ学園を舞台にした療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の完成披露直前でもあり，糸賀思想のキーワードが鳥取での講義の随所に見え隠れしている．しかし，公刊されている糸賀の著作物では登場していない「ミットレーベン（mitleben）」という言葉が，鳥取での講義の大きな特徴でもあり，講義録の発行に際してその語をタイトルに採用した．

糸賀が発した「ミットレーベン」という言葉は，彼の言葉を借りれば「ともに暮らす」という意味で

1　鳥取短期大学幼児教育保育学科

ある.「ともに暮らす」とは，英語では“Live With”になるが,音の響きからドイツ語の造語として「ミットレーベン」を糸賀は用いた．講義の冒頭では，障害児のことを理解するためには,「ともに暮らす」ことが最善の方法だと説いている.「ミットレーベン」の語の意味からは，糸賀が園長を務めた近江学園において，創設時に掲げた三条件（四六時中勤務，耐乏の生活，不断の研究）を想起させるところもある.また,従前からの糸賀の共感思想や発達観に迫ってきた研究や，糸賀が遺した著作における記述などに「ミットレーベン」の言葉を重ねてみることで，新たな発見や解釈を見出す期待も生まれている．本稿では，講義録『ミットレーベン』で登場する「ミットレーベン」の語が発せられた箇所を取り上げ，編者としての筆者の読み解きを紹介する.

1．講義録『ミットレーベン』の特徴

講義録『ミットレーベン』に収まっている講義の内容を柱立てすると，以下の通りである．なお，講義録においては，章立てや見出しを設定していないため，柱立ては筆者による暫定的な整理である．また，括弧の数字は講義録の該当ページを意味する.

【講義】
・「ミットレーベン」（pp.6-7）
・リハビリテーション（pp.7-9）
・一隅を照らす人，その人こそ国宝なり（pp.10-13）
・精神薄弱対策の遅れ（pp.13-16）
・イディオ・サバンの礼賛（pp.16-20）
・国民代表としての言葉（pp.20-23）
・発達保障の願い（pp.23-37）
・集団指導と近江学園の取組み（pp.37-41）
・「夜明け前の子どもたち」（pp.41-45）
【質疑応答】
・タバコを止めた理由（pp.47-48）
・精薄というレッテルへの向かい方（pp.48-52）

前述の通り，講義の内容は糸賀の晩年の著作の中身とも重なるものである．しかし，既刊の出版物とは異なり，聴衆に語り掛ける口調と話し言葉による講義の方が,論旨をより明確に理解出来るであろう.例えば，糸賀が好んで用いていた伝教大師（最澄）の「一隅を照らす」という言葉を引用する際,「一隅というのは，台所の片隅も一隅」（p.12）と例えたり,「（前略）あの子どもたちと一緒に寝起きをして，ししばばの世話をして，青鼻をかんでやったりね．うんこしてもお尻の拭きようも知らんのですから，お尻の拭き方，紙の使い方まで教えてやって．あのぬるっとした感じをですね，手の先まで身体全体でその身震いするような感じというものを，あの精薄の子どもらと肌と肌の仲で感じ取っていく．まさにこれこそ一隅です」（p.12）とも表現している.時にユーモアを交えながらの講義は，出版化された論稿等とは異なり，聞き手自身が己を「一隅を照らす」人物として認識しやすい部分もあったであろう.

糸賀は，この講義の冒頭・中盤・終盤の大きく3箇所で,「ミットレーベン」の語を用いている．前述の通り,「ミットレーベン」の語の使用は，既刊の糸賀の著作物ではこれまで確認できていない．糸賀と言えば,「この子らを世の光に」の名言が知られているが，それとは違い「ミットレーベン」は「仲間内でよくその話し合いの時に」（p.7）用いていた言葉であると講義でも述べている.この点について，冨永健太郎は「管見では」という断りの上で，1964年の糸賀の講義ノートが現時点での初出ではないかとしている[6)].

では，施設内での話し合いや講義の類では使用されていた「ミットレーベン」という言葉が，これまでの糸賀の著作等で使用されなかったのかという疑問も浮かぶ．その理由が，偶然なのか否かについては，今後の研究により解明が待たれる．その意味でも，鳥取における講義で使用した「ミットレーベン」の語を大きく取り上げることで，今後の糸賀研究における新たな展開が待たれている.

２．ミットレーベン（mitleben）

（1） 講義の冒頭における「ミットレーベン」

講義は皆成学園の職員の他に，鳥取県立保育専門学院の生徒たちが聴講していたからだと思われるが,「精神薄弱児」(知的障害児)を理解するにあたっては机上の学問ではなく，施設で「ともに暮らす」ことが一番の学びであるという趣旨から,「ミットレーベン」という言葉が発せられた.

（前略）私は精神薄弱児とは何かというような勉強を大学なんかでしておられる方によく言うのですけども，何かこう心理学の方のね勉強とか，あるいは医学の方から精神薄弱はどういうものをいうのかというような言い方で，いろいろと研究的に話がなされますことに対して，それは勉強は勉強だから一応してもいいけれども，やはりこういう施設なんかにくると，一番良く分かるから，まず施設においでなさい．それから，施設で子どもとですね，一緒に暮らしてごらんなさい．そういうことが一番手っ取り早いし，また，良く分かることなんだということをお話しております．そこであの，大学なんかでは，頭の勉強だけをしているんですね．その理屈のほうを一生懸命で勉強をしておるんですけれども，本当にこの解ろうと思いますと，何と言っても一緒に暮らすのが一番いいわけなんですね.

いわゆるその私は，よくそういう言葉を使っておりますが,「ミット，ミットレーベン」(mitleben) ていうの．日本語でもいいんですけども,「ともに暮らす」.「ともに暮らす」って言うと何だかこうキザっぽいでしょ，言葉としてね．それで，英語のほうだと,「リブ・ウィズ」(live with) ということになる．これも何だか語呂が上手くない．ところが，幸いにですね，幸いかどうか知らないけれども，ドイツ語だとね「ミットレーベン」という言葉があるんですよ． (p.6)

この講義冒頭部分での「ミットレーベン」の意味からは,「四六時中勤務」を掲げた創設期の近江学園が，子どもと職員が寝食をともにして生活していた様子が重なり合う．知的障害児を学問的に理解しようとするのではなく，まずは生活をともにする経験の重要性を柔らかく説いていると言えよう.

（2） 講義の中盤における「ミットレーベン」

筆者の柱立てでは,「発達保障の願い」としている部分が講義の中盤である．ここで糸賀は，気迫がこもった力強い声で再度「ミットレーベン」の語を用いている.

（前略）現に，今日も，昨日も，明日も，ハンディキャップを持った子どもさんたちは産まれているのです．この産まれている子どもさんたちをがっぷりと抱きしめて，親も施設も教育も，そしてその現実の中から，行動の中から，私たちはこの施設を例えば例にとれば，施設の行動実践の中から，問題を掘り下げ掘り下げて，新しい社会が建設されるための砦としての役割を果たしつつあるわけです．こういう考え方というものを行動的理論と私は言いたいと思うのであります．実践的理論ということを言いたいのであります．大学の研究室で，またはそういう子どもたちとの肌の触れ合い,「ミットレーベン」無しに，立ち止まって傍観者的にものを考えて済むことでは無いということをですね．それを，私は中心に置いて考えて参りたいというふうに思うわけなんです.

現在の体制に対して補完的役割をしているというならば，それは結構なんであります．しかし，単にこれを補うだけじゃなくして，それは一つの出発への拠点でもあるということを同時に合わせて考えて，そして実践を続けていくのです．それは立派な，正しい政策や施策が確立するように．それは，改良主義と言われても構いませんです．どんなに改良主義だと言われても，今日よりも明日，明日よりも明後日と，正しい施策や政策というものが，この子ど

もたちの幸せの方向において，築かれていくための努力を社会全体の人と一緒になってやると．一緒になってやる中核には，「ミットレーベン」がそこにあるということ．この「ミットレーベン」を中核にしながら，この子どもたちの世話をしながら，そして現実を切り拓いていくという新しい未来を切り拓いていくというような働き，ここに本当の意味の国民大衆と共に，そこにソーシャル・アクションが起こってくるという理解の仕方を，私たちは持つべきでないかと思うのです．（pp.32-33）

講義冒頭部分の「ミットレーベン」とは異なり，この分野における社会変革や「ソーシャル・アクション」の中核に「ミットレーベン」が位置づくことを強調している．この部分の内容は，「人間と人間が理解と愛情でむすばれるよう」な「新しい社会の建設」を願うという，『福祉の思想』の「はじめに」の内容とも重なりあう[7]．

また，糸賀が遺した言葉としてよく知られているのが「この子らを世の光に」であるが，本講義ではその言葉は直接的には登場していない．しかし，同趣旨の内容が中盤の「ミットレーベン」との関係で，次のように続いている．

だから尻を拭いて，尻を拭くというような，鼻をズルズルの鼻をかんでやるというような，手にその感触がいつまでも残るような「ミットレーベン」の中で，初めて発言ができるというような発言もですね，私たちは尊重しなければなりません．それは，一隅を照らしているからであります．そんなことは，天下国家に関係が無いと人は言うかも知れません．言われてもいいです．言われたって構わない．しかし，必ずこの一隅を照らすところから，この子らが世の光となってくるのです．この世の光となってくるこの光というものが，この子らの存在そのものが，光輝いていくような，そういう育てというもの，教育というもの，指導というものが，社会の財産になる．（p.33）

先に紹介した「一隅を照らす」が，ここでも再度触れられている．糸賀は『福祉の思想』においても，「私たちは，天下を照らすような大げさなスタンドプレイは到底できないものであっても，与えられた一隅をまじめに照らすことはできる．その一隅はどんなに小さな片隅であっても，そこを自らの全生命を傾けて照らしつづけることを理想とすることは可能である．その実践が深く世界に通じ，歴史につながった生き方になると信じたい．」と述べており，一隅を照らし続ける実践が持つ意義を説いていた[8]．この部分からは，糸賀の「共感」思想の根底には，肌と肌の触れ合いによる「ミットレーベン」の経験が重要な要素として存在すると言える．

（3） 講義の終盤における「ミットレーベン」

筆者の柱立てで「夜明け前の子どもたち」としている部分が講義の最後の内容であるが，映画「夜明け前の子どもたち」の告知とともに，「ミットレーベン」について触れている．

（映画「夜明け前の子どもたち」に関して）…ですから是非ご覧下さい．そして，その中から何物かをつかんで下さい．それは私たちに非常にたくさんの大きなね，基本的な技術を与えてくれます．技術を．

その技術は，子どもたちとの「ミットレーベン」から生まれてきます．頭の中だけから，空念仏からは生まれてまいりません．「ミットレーベン」の中から無限に技術が湧いてきます．そして新しい技術は，次の生活を保障します．次の生活は，また新しい技術を生んできます．このクリエイション．この創造，創造的作業，創造活動っていうものが，教育なんであります．（中略）精神薄弱や重症な子どもさんたちとの毎日の触れ合いの中に，実に素晴らしい人生にとってかけがえのない生きる喜びと技術が，その中に隠されているということ．（p.44）

「技術」という言葉は，単に障害のある子どもに対する教育や指導において意味するだけでなく，講

義中盤で展開された社会変革にも通ずるであろう．『福祉の思想』で「この子らを世の光に」の語が登場した後に，「重症の心身障害という限界状態に置かれているこの子らの努力の姿をみて，かつて私たちの功利主義的な考え方が反省させられたように，心身障害をもつすべてのひとたちの生産的生活がそこにあるというそのことによって，社会が開眼され，思想の変革までが生産されようとしている」という一節がある[9]．「ミットレーベン」により「新しい技術」が生み出されることで，「新しい社会の建設」に繋がるという意味としても理解できよう．

3．「ミットレーベン」の意味

糸賀が用いた「ミットレーベン（mitleben）」はドイツ語の造語であるが，糸賀が大学時代に学んだ哲学の世界でも用いられている．例えば，西田幾多郎は哲学と芸術に関わって，次のように mitleben という言葉を用いている[10]．

しかし芸術作品はやはり何かを写すとか，表現するとか考へられる．では何を表現するのかと云へば，私はそれは真実在を写すのだと云つてよいと思ふ．無論，真実在とは何かといふことはむつかしい問題であるが，私は真実在とは我々が直接に体験する生きた生命だと一応云つておかう．時間，空間，因果律といつたもので統一された物理的現象の如きものではなく，ベルグソンの所謂純粋持続の如きものが真実在である．我々はそれを概念的に分析して知るのではなく，云はばそれと共に生きること，即ち mitleben することによつてそれをぢかに知るのである．例へば花を見る時に，花弁は何枚あるか，といふやうなことをいくら正確に数へても，それでは真実の花の生命に触れてゐるのではない．我々は花と mitleben〈共に生きる〉ことによつて花の真相に触れるのである．

西田幾多郎は，糸賀の指導教官である波多野精一とともに京都学派を代表する哲学者である．代用教員時代に糸賀が出会い，そして影響を受けた木村素衛は，西田の門下生である．西田・波多野・木村という三人の哲学者は，糸賀の思想を語る上では欠くことが出来ない存在であるが，糸賀が発した「ミットレーベン」の語は，まさしく西田が説く「花の真相」の例えと同じである．つまり，障害のある子どものことを理解するにあたって，その真実在は「直接に体験する生きた生命」としての経験であるということである．仮に西田の「花」を「障害児」と置き換えた場合，「障害児と mitleben〈共に生きる〉ことによって障害児の真相に触れる」というのが，糸賀の言う「ミットレーベン」になる．鳥取での講義の冒頭で触れた際の「ミットレーベン」の意味は，西田が説くこの部分と重なり合う．

また，糸賀は近江学園創立6年目に，次のように記している[11]．

われわれは本来お互いに「今ここに生きている」という実感の中にある．この生命の実感は理屈ではなく，まず何よりも肉体的な感覚であるのだが，この生命の実感の中には，肉体的から精神的なものまでの，実に様々な要素が盛られているものであって，究極するところ，生命は幸福の実現を追求して行く一つの流れであるといえるかも知れない．

デカルトが存在の根源をたずねて「我惟う」と言ったように，メーヌ・ド・ビランは，「根源的事実」を探求してそれを出発駅とし，ベルグソンは「生命の躍動」を説き，西田幾太郎（ママ）氏は「純粋経験」を深く味わった．そのようにわれわれも最も端的に生命の根源的事実にさかのぼるような純粋な体験を味わってそれを万人共通の出発駅とするのでなければなるまいと思う．

此の直観は，一切の意欲を生み出す深い根源であるとも言える．それと同時に，相対に対して絶対を，有限に対して永遠をさし示すものでもある．

ここでの「生命の実感」は，糸賀が言う「ミット

レーベン」の中から生まれる.「ミットレーベン」により,「生命の根源的事実にさかのぼるような純粋な経験」を味わい,「幸福の実現を追求」する「万人共通の出発駅」として,「今ここに生きている」という事実が共有されていく.その事実は,傍観者的に立ち止まって考える知識的経験とは違い,現実の社会をそして未来を切り拓く可能性を持つものである.「ミットレーベン」は,その中核であり「出発駅」である.「ミットレーベン」から始まるソーシャル・アクションにより創られていく新たな社会や時代,自覚者としての糸賀の責任が力強く語られたのが,鳥取での講義の中盤・終盤での「ミットレーベン」の意味であろう[12].

4.「ミットレーベン」の理解

糸賀は「ミットレーベン」の邦訳を,講義の中では「ともに暮らす」という形で語った.一方で,西田は「共に生きる」と表現しているが,「ミットレーベン」=「ともに暮らす」または「ともに生きる」とすると,表面的な形で誤解を生む可能性がある.

例えば,近年「共生社会」という言葉が政策的にも語られることが多くなった.2012年の中央教育審議会初等中央教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」報告では,「共生社会」を「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が,積極的に参加・貢献していくことができる社会である.それは,誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い,人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である」としている.しかし,糸賀や西田が表現した「ミットレーベン」は,現代の「共生」の意味よりも,もっと深い次元での捉え方を要するであろう.それは単に,障害児と非障害児が対等的で相互承認的な社会構築だけをもって「共生」と語るのではなく,そこに「共感」的思想を根底に有するかが重要となる.

糸賀と共に近江学園を創設した田村一二(1909〜1995)は,著書の中で次のように述べている[13].

本を読んでも,話を聞いてもなかなかわかりにくい障害児・者への理解を,体験入村をしてもらって,寝食を共にし,一緒に作業をして,いわゆる「流汗同労」の形態の中で「相手の立場になって考えられる」つまり「愛」を摑んでもらう.障害のある人たちへの「広い心」「あたたかい目」を得てもらった人が,又もとの社会に帰ってもらう.このようなあたたかい「目」が一つ二つと増えていって,この目の層が厚くなることが本当の福祉だと私は思っている. (p.14)

つまり,学生,生徒たちは,ボランティア活動として施設へお手伝いに行く.そこで子どもたちの「流汗同労」或いは「遊戯開心」の形態をもって接触する.

この接触によって,相手のことがよくわかり,そこから,相手の身になって考えることができ,相手の立場になって考えることができるようになる.

これを,亡き糸賀一雄先生は,「愛とは相手の立場になって考えられるということだ」と教えて下さった.この言葉は骨身に沁みて忘れられない. (p.65)

田村が言う「流汗同労」は,糸賀が鳥取での講義の冒頭で述べた「ミットレーベン」の意味にも通じるであろう.そして,共に汗を流す形での生活経験を通じて,「『相手の立場になって考えられる』つまり『愛』を摑んでもらう」ことにより,糸賀が講義の中盤で力説した「現実を切り拓いていくという新しい未来を切り拓いていくというような働き,ここに本当の意味の国民大衆と共に,そこにソーシャル・アクションが起こってくる」ということが期待される.

また,糸賀は滋賀での「最期の講義」において,「愛というものはね,育つものです.愛がもともとあるから育つのです.愛は,どこからかお金で買ってきたようなもんじゃないんです」と述べている[14].田村が回顧する糸賀の「愛とは相手の立場になって考えられるということだ」という「愛」は,「ともに暮らす」生活の中で,育てられ高められて

いくものと言えるだろう．つまり，障害児との生活を通して「生命の根源的事実にさかのぼるような純粋な体験を味わって」こそ「真実在」を直に知ることができ，その営みにより掴んだ「愛」が高められていくことで，創造的作業への意欲が生み出されるのである．

糸賀の「共感」思想は，洪浄淑らによると「障害者を一般的・知的に理解するというより，個人の内面に入り，個人に共感するといった，感情の作用を含むものである」[15] と解されるが，その「共感」の根底にあるのが「ミットレーベン」に他ならない．

おわりに

講義録『ミットレーベン』にも登場するが，晩年の糸賀は「根っこ」「根を張る」といった語も多用している．一つは，近江学園やびわこ学園での療育実践を通じて高められた「ヨコへの発達」の意味であるが，もう一つの意味で「根っこ」「根を張る」の語を用いている．蜂谷俊隆は，糸賀を下村湖人の「煙仲間」運動と結びつけて検討したが[16]，「根を張る」という言葉は，蜂谷が指摘する糸賀が影響された煙仲間運動における「地下水的な役割」を想起させる．その点に関して，鳥取での講義で次のように述べている．

静かに己を抑えて，本当に本当の自由というものを，我々のものにしていくためのプロセスを，私は尊重したいと思いますね．そういうものが国民に訴えるでしょ．我々はですね，憤激して火花を散らしている者を見て，ビックリは致しますけれども感動は致しません．人を驚かすことはできても感動させなきゃいけないです．腹の底から揺さぶりをかけていけるものでなければいけない．精薄対策もそうです．ただいたずらに憤激してだけいないで，一人から一人へ，またもう一人へですね，揺さぶりをかけて響きあっていくというような，その浸透の仕方をですね，説得をしていきながら，そして人間というものはどういうものだろうかということを一緒に，生活の中で深く考えるってことが大切ですね．　(p.20)

この文脈を「精薄対策」に限定することなく，あらゆる意味から理解することが必要であろう．この発言部分の直前では，戦争や米海軍のエンタープライズ佐世保入港について触れている．同様の内容は，『福祉の思想』の「はじめに」でも見られるが，1960 年代後半のわが国や国際的にも対立していた二つの社会観を超え，「人間と人間が理解と愛情でむすばれるような社会」といった「新しい社会の建設」に向けての糸賀の想いが読み取れるであろう．そして，「どんなにささやかないとなみであっても，それは実践しているという強みがある．実践のなかからうみ出された考察が，地域社会の人びととのかかわりのなかで声となり力となり，それは施策や政策をゆりうごかすものとなる．」とも述べている[17]．「新しい社会の建設」に向けて社会を変革する，またソーシャル・アクションを起こすことは一気呵成ではなく，「揺さぶりをかけて響きあっていく」ことで「浸透」する形を求めていたことになろう．そのことからも，「共感」により「響きあっていく」，つまり「共鳴」もまた，糸賀がめざしたところであったと言えよう．

注

1）糸賀一雄（國本真吾編）『ミットレーベン～故郷・鳥取での最期の講義』第 14 回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会実行委員会，2014 年．なお講義録『ミットレーベン』は，鳥取県障がい福祉課の HP でダウンロードが可能である．
http://www.pref.tottori.lg.jp/247318.htm

2）本講義の内容は，1969 年の「かいせい」第 12 号（鳥取県立皆成学園）においても文字化されている．その際は，表題を「郷土鳥取での最期の講議（ママ）　夜明け前の子ら」としていたが，講義録『ミットレーベン』ではその一部を副題として使用した．

3）「『障害福祉の父』肉声テープ」読売新聞鳥取版，2013 年 6 月 11 日付．鳥取県立図書館では，デジタル化された音声データが貸出用の資料として用意されている．

4）糸賀一雄『愛と共感の教育』，柏樹社，1969 年（増補版 1972 年）．後に，『糸賀一雄の最後の講義―愛と共感の教育―［改訂版］』，中川書店，2009 年，として再編集されたものがある．なお，翻訳版として，王明洁・金栩・雨时による中国語訳『教育科学論集』（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育科学論コース）第 18 号，2015 年，pp.44-56，金仙玉・朴祉玟・張主善による韓国語訳『同』第 19 号，2016 年，pp.18-30 がある．

5）糸賀一雄『福祉の思想』，NHK 出版，1968 年．奥付によると，同年 2 月 10 日が初版の発行日である．

6）冨永によると，糸賀の関係史資料を所蔵している「一碧文庫」で確認された “mitleben” の語は，講義ノート「昭和 39 年度（2）講義メモ　京都府立大学―福祉学原論　糸賀一雄」と「昭和 40 年度西日本養護施設研修会レジュメ『児童理解のための事例研究について』」（1965 年 4 月 21 日）であった（冨永健太郎「ミットレーベンと教育愛―糸賀一雄最晩年の思想―」日本特殊教育学会第 53 回大会自主シンポジウム「糸賀一雄『ミットレーベン　故郷・鳥取での最期の講義』（1968 講義／2014 発行）を読み解く―糸賀一雄研究（2）」配布資料，2015 年 9 月 19 日）．

7）前掲 5)，p.13.

8）前掲 5)，p.52.「精神薄弱児の道徳教育」における「道徳性の探究」に関しての記述から．

9）前掲 5)，p.178.

10）西田幾多郎「哲学概論」，『西田幾多郎全集』第 15 巻，岩波書店，1952 年，pp.31-32．なお，引用にあたっては，旧字体を新字体に置き換えた．

11）糸賀一雄「生活即教育」，『南郷』第 12 号，1952 年（『糸賀一雄著作集Ⅰ』，NHK 出版，1982 年，pp.257-261 再録）．なお，引用にあたっては，旧字体を新字体に置き換えた．

12）西田哲学と糸賀思想を結びつけた検討は糸賀研究においては珍しいが，遠藤六朗「重症児（者）福祉における実践の問題―『この子らを世の光に』を西田哲学の行為的直観から考える―」，『糸賀一雄「この子らを世の光に」ひかりの顕現―重症心身障がい福祉が照らす生命・共生・ネットワーク―』，中川書店，2015 年，がある．

13）田村一二『賢者モ来タリテ遊ブベシ～福祉の里　茗荷村への道～』，NHK 出版，1984 年．なお，本文中の頁数は，本書の引用部分を意味する．

14）『糸賀一雄の最後の講義―愛と共感の教育―［改訂版］』，中川書店，2009 年，pp.46-47.

15）洪浄淑・松矢勝宏・中村満紀男「糸賀一雄の『共感』思想に関する考察」，『心身障害学研究』第 25 巻，2001 年．

16）蜂谷俊隆『糸賀一雄の研究』，関西学院大学出版会，2015 年．

17）前掲 5)，pp.14-15.